

川田順研究 —歌集『東帰』の世界—

野地安伯

Kawada Jun: The world of collection tanka *Touki*

Yasunori Noji

歌人川田順は、1897年、16歳にして佐佐木信綱門下生となり、早くからその俊才ぶりを発揮していた。初期の浪漫的色彩の強い歌集『伎芸天（ぎげいてん）』をもって歌壇に注目されたが、やがてその歌風を大きく転じ、写實的、現實的の歌人としての地位を確立するに至った。

しかし、第二次世界大戦中の作品、いわゆる愛国の歌を数多く発表した態度が、戦後の批判にさらされるところとなった。また、その頃の自らの恋愛問題が、「老いらくの恋」として世に喧伝されたこともあって、歌壇においては不遇な一時期を過ごさざるを得なかった。だが、自らの苦しい人生経験を根底におく歌集『東帰（とうき）』によって、順は新たな境地を切り開いたのである。本稿は、この『東帰』における人事詠、自然詠等を通して、川田順の至り得た世界を考察するものである。なお、作品の背景となった出来事、周囲の自然、人々との交流について、可能な限り具体例をもって示していきたい。

The poet Kawada Jun became a disciple of Sasaki Nobutsuna at the age of 16 in 1897 and demonstrated his exceptional talent from his early years. With his initial anthology *Gigeiten*, which was tinged with romanticism, he attracted the attention of the world of tanka poets. Later, he changed his poetical style greatly and established his status as a realistic and naturalistic poet.

However, in the postwar period, Jun was exposed to wide criticism for having published poems during the World War II, which were largely based on patriotic themes. Moreover, since his illicit love affair at the time was widely known as “December love,” he had an unfortunate period among the tanka poets for a while. In spite of that, through the anthology *Touki*, Jun opened out a new path which gave an insight into his difficult life. This paper considers the literary world that Kawada Jun opened up, viewed in the light of his poems in *Touki*, concerning human affairs, nature, etc. In addition, I would like to illustrate as many instances as possible of his surroundings, relationships, opportunities, etc. that provided motifs to his works.

一 国府津まで

昭和二十四年三月二十三日、川田順は、京都の平野神社の神前において鈴鹿俊子と結婚した。共に再婚であった。仲人は中外日報社主の真溪涙骨で、以前に吉井勇に紹介された人である。順は世に喧伝された「老いらくの恋」を成し遂げたのである。このとき、順六十八歳（数え年）、俊子四十一歳（同）であった。その日の様子を、歌人自身このように書き記している。

（前略）ボクら二人は涙骨翁をまんなかにして左右に立ち、かしは手を打ち、神官からおみきを戴いて結婚式は至極簡単に終了した。それから鳥居前の「おかもと」旅館で披露の晩餐会をひらいた。列する者はボクら新夫婦と、涙骨翁と、ボクの息子の周雄と、俊子の老母と、五人だけであった。すべてこれほど質素な結婚式はあるまい。しかもボクは費用を全く負担しないですんだ。

（二川田順遺稿集香魂）

その翌日、二人は新聞社の目を逃れ、養子周雄かねおと真生子（俊子の長女）のみに見送られて、京都駅から鈍行に乗った。行先は神奈川県足柄下郡国府津町こうづつ（現小田原市国府津）であった。順は、明治十五年、漢学者川田剛（甕江）の側室の子として浅草に生まれ、生母の死後、牛込の本邸に引き取られた。東京育ちである。関東とはいえ、国府津は未知の鄙の土地ゆえ、まさに「東下り」の思いであつたらう。だがそれはまた、現実の状況にあつては、むしろふさわしい場所であつたと言えるのではないか。

この国府津の住み家を斡旋したのは、当時の朝日新聞出版局長嘉治隆一氏である。氏は部下の神谷諱雅氏（国府津の古利宝金剛寺住職ほこんじ）にこれを托した。その神谷氏の相談に、実業界の長老の名取和作氏が同情して、たまたま空いていた自宅の離亭はなれを、二人の仮住まいとして提供したのであった。

二十四日、京都を出発した順夫妻は、途中の名古屋駅に下車して、歌人浅野保宅に一泊。翌二十五日、

再び鈍行に乗って湘南鵠沼の秋山順一氏（順の住友時代の同僚）宅にたどり着き、そこでまた一泊している。これほど慎重な行動をとったのは、やはり新聞社に知られることを避けたためである。「全く以つて落人おちんどの身の悲しさである」という述懐（同右）は本音であったにちがいない。

そして、その翌朝、二人はようやく国府津駅頭に降り立った。幾許かの荷物と蝙蝠傘とを携えたのみの順夫妻を、妹の藁谷みか子とその養女でるが出迎えた。一行は「春色漸く深い田舎道、不二箱根連山の霞んであるのを眺めながら、皆徒歩で名取別荘にたどり着き、七十八歳の翁に挨拶した」（同右）のであった。国府津駅から名取別荘までの道程は二キロほどあり、当時の道路事情と、慣れぬ一行の足どりからすれば、三十分以上を要したことだろう。山裾から中腹にかけて建てられていたその別荘は、今日すでになく、一帯は七十余軒の住宅街になっている。

この寓居における数年間の生活は、順夫妻にとつ

て生まれて初めてのものであり、物心両面での苦勞は、おそらく予想を遙かに超えたものであったに相違ない。それは、二人の行動に対して天が与えた試練であったか。『論語』に「六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども、矩かねを踰こえず」（為政篇）とある。六十代半ばを過ぎてから激しい恋に陥った順は、煩悶し、身内や友人たちの助言、忠告を受けつつ自問自答し、ついに七十直前にして自らの心に忠実であろうとした。年齢の上では少し早い、言わば矩を踰えたのである。順の言に従えば「真実にして不倫なる恋」（『孤悶録』）であり、しかもそれは、歌人自らにとって「宿命」なのであった。順の『私の履歴書』にこう記される。

最初が最終を決定する。人間は生まれ落ちた瞬間に一生の筋書きを渡される。いやでもおうでも、その筋書きのとおり歩まねばならぬ。ボクは宿命説の信奉者である。

二 老いらくの恋

本稿の中心とする歌集『東帰』^{とうき}は、昭和二十七年六月、長谷川書房より刊行された。順の第十三歌集である。そこには、昭和二十二年一月から二十六年十二月に至る五年間の作品四百五十七首が、制作年代順に配列されている。「後記」に、

廿四年の春三月、私は四十年ぶりで、故郷東京の方面へ帰住したのであつた。その記念として「東帰」と名づけた。「東帰」といふ語は、唐の李涉の有名な七絶の中から拾つた。

と述べられている。ここに言う「唐の李涉の有名な七絶」とは、次の「竹枝詞」一編（『全唐詩』『三体詩』所収）を指すと思われる。

十二峯頭月欲低。空聆（一作濛）灘上子規啼。
孤舟一夜東帰客。泣向東（一作春）風憶建溪。
この転句「孤舟一夜東帰客」は、まさに順の心情に重なり合うもののごとくである。^{（注二）}

なお『全唐詩』には、この他に李涉作の「竹枝

詞」三編が収められているが、『唐詩三百首』『唐詩選』共に右の作品を収めない。

『東帰』は、その内容において、また表現において、川田順の至り得た歌境を示すものである。そしてその中心をなすものは、俊子夫人との恋と、それに続く国府津での実生活における感情の表白であり、さらにまた極めて客観的な自然諷詠である。感情は直叙される場合もあるし、それを託した自然描写となつて表れる場合もある。具体例は後に示す。

ここで、その恋のいきさつの概略を、歌人自身の文章によつて記す。順は元京都大学教授中川与之助博士夫人の俊子に惹かれていった心情を、過去に遡りながら語る。俊子は順の短歌の弟子であつた。

いつよりか君に心を寄せけむとさかのぼり
思ふ三年四年を^{みとせよとせ}

そもそも私の心は何時頃から××さんと交渉を持ち始めたのであらうか。彼女へ愛を告白したのは昨廿二年初夏某日、近所の山中で草の上

に坐りながらのことであつたが、愛そのものの芽生えは、自意識したと否とに関はず、もつと久しい以前のことと相違ない。いつまで遡れるか。

私は一昨廿一年の二月から、東宮御所に伺ふため、殆ど毎月一回上京した。^(注三)昨廿二年正月下旬東京から帰つて来ると、詠草を携へて来宅した彼女は「先生が京都を離れて御旅行なさると、お帰りになるまで私はさびしいんです」と言つた。彼女は師弟の間柄の温かさでさう言つたに相違ないのだけれども、私の心耳へは、もつと異なつた深い意味の声であるかの如く聞えた。私は幾歩か彼女へ近づいたのである。(中略)さらに遡る。廿年の末頃に生活社の叢書の一つとして「寸歩抄」といふ極めて小冊子の拙歌集が出版された。彼女へも一部贈与すると、「これはふところに入れて、どこへ行くにも放しません」と彼女は言つた。その時、私の心は彼女へ寄つて行つたにちがひない。(中略)さらに

遡る。その前の年(十九年)の盛夏の日、既に灼熱を感じる午前十一時頃、疎水の下の道路で彼女に行きあつた。白いワンピース・ドレッズを着て氷のかたまりを重さうに片手に提げてゐた彼女は、若若しく綺麗であつた。「お宅へ伺ひませう」と私は彼女について行つた。既に何かしら引かれていたのであらう。結局、遡つて初対面の時まで行つてしまふ。東山鹿ヶ谷の島文次郎先生の邸で、十九年五月某日初めて彼女と同席した時に、互ひの心には何等意識しなかつたけれども、「宿命」が仲介の役をつとめて傍に坐つてゐたのだ。(以下略)。(『孤悶録』)

これによれば、二人が初めて顔を合わせたのは昭和十九年五月ということになるが、総合誌『短歌』の「川田順追悼特集号(昭和四十一年四月号)」の年譜(鈴鹿俊子・鈴木貫介編)においては、これを昭和二十一年五月のこととしている。『孤悶録』所収の文章が書かれたのが昭和二十三年五月から六月であるから、記憶力の確かさで知られた順が、俊子

との出会いの時を二年も違えるとは思えない。ただ、年譜を編んだ一人が当の俊子夫人であり、もう一人の鈴木貫介もまた、国府津時代の順に直接学び、優れた写実詠を残した歌人であったことを考えると、興味深い事柄ではある。

世間の注目を浴びた「老いらくの恋」という言葉は、順の長詩「恋の重荷」の序章から来ている。そこに言う。

若き日の恋は、はにかみて／おもて赤らめ、
 壮子時をさかりの／四十歳よそぢの恋は、世の中に／かれこれ
 心配くまれども、／墓場に近き老いらくの／恋は、
 恐るる何ものもなし

歌人吉野秀雄が、「川田順大人の思い出」という追悼文を書いている。(前出『短歌』)。その中で、女性の思い出のみによって綴られた順の自叙伝『葵の女』に触れ、その華麗な世界の恋愛談に驚いたと同時に、聡明な順が「ボクは正直さが足りなかった。……常にさきさきのことを計算していた。」と「白状している点」に注目したことを述べる。そし

て、「そこへいくと、〈老いらくの恋〉は気持ちがいい。ご本人が詩の中に『墓場に近き老いらくの恋は、恐るる何ものもなし』とうたう通り、〈計算〉ならぬ〈情痴〉の〈痴〉のあることがわたしは好きだ」と、右の詩を引き合いに出しているのである。

三 裸心(1)

『孤悶録』に、「裸心」と題する二百十四首が収められている。夫も子もある女性との苦しい恋情とそれに伴う行動とを歌い上げたもので、連作として強く迫るものがある。『東帰』には、その中から百首が抄出され、同じ「裸心」という題名を付して、昭和二十二年の章に四十七首、昭和二十三年の章に五十三首と、分けて収められている。「後記」に「……この問題に関した拙吟のすべては、朝日新聞社刊の孤悶録に収めたが、本集にはその約半分を採つた。この種の群作は厳選すべきであつたが、たくさん捨てると格好が附かなくなるので、やむを得ず寛選した」とある。

『孤悶録』の「裸心」冒頭三首は、その捨てられた作品であり、中に上述の「いつよりか君に心を寄せむと」という一首も入っている。

『東婦』の「裸心」（昭和二十二年）は次の作品から始まる。^(註)

檜の実のひとり者にて終らむと思へるときに君
あらはれぬ

連作（群作）の冒頭に置く一首という観点から両者を比較すると、やはり歌集の「檜の実の」に落ち着くだろう。単純化の行き届いた作品としての完成度の点においても、また、ここから恋が始まるのだという予感を、読者により強く抱かせるといふ点においても、「檜の実の」の一首の方が据わりが良い。一連の構成面で十分な配慮がなされていると見ることもができる。この「檜の実のひとり者」については、上田三四二が『万葉集』巻九「雑歌」の部の長歌に、「……ただ独り い渡らす児は 若草の 夫かあるらむ 櫃の実の 独りか寝らむ……」などの用例があることを伝える。（『戦後の秀歌Ⅱ』）。

以下はこれに続く二首である。

別れ来てはやも逢ひたくなりけり東山より月
出でしかば

板橋をあまた架けたる小川にて君が家へは五つ
目の橋

ここに見るように、作者はさながら少年のごとき心躍りをもって「君」を思っている。まことに一途である。

夏山の夜よるの青さに見惚れをりそのふもとはは君
が家あり

夏至の朝早く来しかばすがすがし門のべにして
君が草抜く

山羊小舎に乳飲みに君を率てゆかむ明日を樂し
み今宵わが寝る

吾が髪かみの白きに恥づるいとまなし溺るるばかり
愛かなしきものを

山家集に一首すぐれし恋のうた君に見せむと葉
を挿む

部屋の戸をひそかに叩く音すればわれ跳ね起き

て帯しめなほす

むらさきの日傘のいろの匂ふゆゑ遠くより来る
君のしるしも

むらさきの日傘すほめてあがり来し君をし見れ
ば襟あしの汗

等々、先の吉野秀雄の言「情痴」の「痴」に
溺れた姿が、ここには紛れなく歌われている。上田
三四二（前出）は「むらさきの日傘のいろの匂ふ
ゆゑ」という歌の背景に、同じく『万葉集』巻一の
「紫草むらさきのほへる妹いもを憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋
ひめやも」があることを示し、「作者がそれを明瞭
に意識していたかどうかは別として、やはり言える
ように思う。ここに歌われている日傘の女性も人妻
であった」と、慎重な言い回しの中にその典拠を挙
げている。この一首の次に引用した、

「むらさきの日傘すほめてあがり来し」を併せ読
めば、上田の言が納得できよう。

沖つ藻の名張の町にたなばたの今宵わが居り俊
子は遠く

「裸心」百首中、「君」の名が明かされるのはこ
の作品のみである。さりげなく置かれた一首ながら、
そこに作者の周到な留意が感じ取れるのである。因
みに、『孤悶録』（前出）所収の「裸心」には、五首
に「俊子」と歌われている。

四 裸心（2）

昭和二十三年の章にある「裸心」においては、前
年の諸作に比し、ひたすらな心情には変わりがない
ものの、やがて二人の恋が世間に知られ、非難の目
が厳しく注がれることに対する苦しい心情が、様々
な形で歌われるのである。

押し黙りわれは坐りぬこの恋を遂ぐるつもりか
と友の驚く

わがこころ環たまきの如くめぐりては君をおもひし初
めにかへる

相触れて帰りきたりし日のまひる天の怒りの春
雷ふるふ

いもうとのふみ取り出でて今宵も見つ君に逢ふ

なと書きであるはや

つひにわれ生き難きかもいかさまに生きむとし
ても生き難きかも

肝ふとき恋をしながら肝ちさきわれにもあるか
世の中を恐る

この頃、俊子はすでに夫と子らを家に残して、母親の家に身を寄せていた。やがて順は、俊子の夫であり、自らの知人でもある中川博士に謝罪しようと、聖護院御殿の研究所を訪ねたのだった。しかし博士は、「是非にても御引見希ふ」と書いて取次ぎを請うた順の名刺に、「貴下にはお会ひ出来ません、永久に」とペン書きして執事に託した。これに対して順は、「××博士の胸中も充分に察することが出来る。私は直接に面会して謝罪するの機会を永久に与へられないのだ。私の罪業は余りに深い」（『孤閨録』）と激しい自責の念にかられるのだった。この罪の意識はその後も順の心から消えることはなかった。『東帰』の昭和二十五年の章に次の一首がある。この妻にその子供らに吾が負へる罪代つみしろおもし背

の曲がるまで

かくして、「つひにわれ生き難きかも」と思い決めた順は、昭和二十三年十一月末日、東山法然院の川田家墓所で自殺を図ったのである。

順の著した「西行伝」に、「西行ほどの価値がない一介の人間が世を捨てる時でも、自殺する時でも、原因は表面に現はれたよりも複雑なのが常である。人間は八方ふさがりになった時に脱出するものだ」という一文がある。順は自殺によって「脱出」を図ったのだ。だが、それは結局未遂に終わったのであった。「宿命」がそうさせなかったのだろうか。

この世に再び生きてはじめての外出そとでの道の冬の夜の月

たまきはる命うれしもこれの世に再び生きて君が声を聴く

これら「裸心」一連の作品について、順に親しい五島茂は「事件ルポルタージュ的作品群」（前出『短歌』）として、さほどの評価を与えていない。だが、そのような要素を包含しつつも、全体として、

高く緊張した調べに支えられた佳品が多いことは確かなのである。

総合誌『短歌研究』（昭和二十一年五月号）に、岡野直七郎の「吉井勇論」が掲載されている。その中で岡野は、勇の『祇園歌集』『祇園双紙』の中の数首を挙げ、「恋愛は誰でもする。人間ばかりでなく禽獣虫魚も恋愛をする。然し恋愛をただけでは、よい恋愛の歌は作れない。また恋愛に悩むこと深い者が必ずしもよい恋愛の歌を生むでもない。よい恋愛の歌を作ることは一つにかかつて作者の詩才の如何にある」と論ずる。

これは遊里の恋歌を作る勇を評価するもので、順の恋愛の場合とは質を異にする。だがそれでもなお、連作「裸心」についても、この論旨をあてはめて味わうことが可能なのではあるまいか。

五 東帰

『川田順ノート』（鈴木良昭）は、順に関東へ転居する決意を促した、最も大きな激励の文書として、

下村海南の手紙を挙げている。そこには、「今度の事件を拍車として大きな目標を捉へ、彼岸に到達すべく精進せられよ。その道筋としては先づ居を移すべし。日本人の大熔爐たる大東京に来れ」という海南の一書に接し、順は深く感謝したことが記される。海南は、佐佐木信綱門下の同門の一人であり、順が人生の師とも仰いだ人物であった。同書にはまた、歌友の尾山篤二郎宛の順の書簡（昭和二十四年正月五日付）が紹介されており、そこに「死損ねが生き損ねをせぬやうに、努力工夫いたすべく候、その一つとして居を東京方面に移すこと決心いたし候」と認められてある。

その「生き損ねをせぬやうに」暮らそうとした「居」が国府津なのであった。「大東京」ではないが、順にとつては、贅沢を言える状況ではなかつただろう。

足柄のふもとの田居たみに肝きもふとく新らしき生よを創はめなむとす

移り来て荷をほとき居る縁側を蜜柑やまより人

に見られつ

庭さきに七厘すゑて者炊にたきする妻のすがたも目馴
れ来にけり

雨のふるさ夜中にしてさめをれば相模の国の片

田舎なる

事無しに生きむと願ふここにさへ世の人言ひとことはな
ほも追ひ来る

わが側に坐れる妻は鍋墨の付きしその手をかく

すことなく

わが夢は現うつとなりてさびしかり田居のすみかに
枕を並ぶ

昭和二十四年の章、「東帰」と題する十五首中の
の七首である。「始め」ではなく「創はじめ」としたと
ころに強い思い入れがある。また、「人に見られつ」
という意識は、俊子との恋が進行しつつあったとき
も、結婚した後も、絶えず順の心中に存在したに
ちがいない。自らの「裸心」を作品に託した歌人
は、同時に「裸身」をも世間に曝して生きねばなら
なかつたのである。「事無し」には、予期した以

上に世間の目がわが身に注がれていることを知った、
という実感が滲んでいる。

また、「雑詠」と題する七首中にも、このように
歌っている。

わが恋を映画にするといふうはさ耳に痛けどせ
むすべなしも

いかさまに映してわれを嘲るか笑ふか知らずせ
むすべなしも

現状を思えば、「せむすべなしも」と詠嘆するし
かなかつたのであるう。

順は以前に、自らへの格下げ人事に憤り、住友最
高の権力者であった鈴木馬左也総理（内部では総理
事と称した）に、臆することなく膝詰め談判したこ
とがある。（『住友回想記』）。それによってかえって
重用されるようになった。しかし、その後には得た住
友常務理事の地位からも突如として退き、短歌一筋
の道を選んだのである。十六歳にして佐佐木信綱に
入門し、やがて第一歌集『伎芸天』により、歌壇に
その名を知られていたとはいえ、住友の総理に最も

近いとされた、実業家としての高い地位を捨てたのである。次に、鈴鹿俊子との恋を遂げるために、家財一切を子らに譲って国府津に逃れ、かくのごとき日常を味わうに至ったのである。そういう道を敢えて選択した、一種昂然たる順の姿勢の根底にある精神はいかなるものであったか。

石川一成は「川田順論」(『心の花』八〇〇号記念特集)「川田順私論」(前出『短歌』)において、「順の生涯は一処に定着することを欲しない感情の高揚によって支えられている」「勿体ぶらずに、率直に表現するところに順の性格が表れて」いるとした上で、その根底にある意識の一つに「庶子として、生を受けた順が後天的に養ったであろう反骨とそこからの脱出」があることを挙げている。そしてまた一方において、「逆境を切り拓く力となったものとして、すぐれた天賦の能力、それに加えて、名儒川田剛の子であるという誇りもある」と指摘する。上述のごとく、一生における幾度かの転身と、その度に直面する労苦に対し、順はそれを現実のものとし

て全身で受けとめ、怯もうとはしなかった。果敢な身の処し方で曖昧さがないのである。この強かとも見える矜持の姿勢を崩さなかった歌人の心の在り所を示すものとして、右の石川一成の視点は明快である。こうした揺るぎのない姿勢は、『東帰』のみならず、他の短歌作品や文章の上においても顕著である。それらはまことに菌切れが良い。

六 掬泉居

「掬泉居」^{きくせんきょ}とは順夫妻が住んだ離亭^{はなれ}のことである。わが門の山井の清水あふるるを見らくゆたけし
出で入りごとに (『東帰』)

と歌われているように、住まいの門口の様から歌人自身が名づけたものである。この掬泉居の日常生活における哀歎が、写実(現実)的手法をもって様々に活写されている。

春の雪はだらに残るやまなみの低きところやあ
しがら峠 (『掬泉居 春』)
背面なる枯草やまの日だまりに野蒜^{のびる}を掘りぬ手

の臭ふまで

裏やまのうるしの大木見えぬまで咲き絡む藤は
なほ盛りなり

南かぜ海より吹きていちめんの穂麦はたけに潮

の匂ひあり（「掬泉居 夏」）

夜をふかみ遠き蛙のこゑきこゆさらに遠くに浪
の音あり

崖下の我が家の裏は陽を疎み踏みどなきまで毒

だみの花

庭のすみに妻が作りし赤茄子は幾つ取りけむ今

日にて終る（「掬泉居 秋」）

けものかも山の禽かもこつこつとあらしのあと

の屋根を歩める

あしがらの山根に及ぶ垂穂田を二日三日にて刈

田となしつ

さしのぞくわが顔ひとつ映りゐて冬の山の井に

生けるものなし（「掬泉居 冬」）

虫の音はみな亡びたる霜夜にて天つ空ゆく雁の

こゑあり

除夜の鐘を衝く寺もなき田居にして宵のうちよ
りわれ寝ねむとす

歳の旦わが出でくれば門のべに自然薯掘りし深

き穴あり（「掬泉居 新年」）

あしがらに雲うごく日の多けれど吹雪の雲の速

度はちがふ

ふくるままに相模の海の潮騒の大きくなりて元

日終る

これらの作品は、すべて歌意明瞭にして、調べは
およそ滞るところがない。「手の臭ふまで」「さらに
遠くに浪のおとあり」「さしのぞくわが顔ひとつ映
りゐて」など、物を見据える目の行き届いた表現で
あると言えよう。

『伎芸天』（大正七年刊）において、その浪漫的歌
風を展開させた順が、こうした写実的現実的詠風に
転じたきっかけとして、大正八年秋の窪田空穂との
出会いをもってすることは、ほぼ定説になっている。
ただしこれについては、空穂よりはむしろ、「順が
学び消化したのは石樽千亦だろう」とする指摘（佐

佐木幸綱「体内の虫―川田順」もある。いずれにしても、眼前の景を大胆かつ緊密に掴み取る手法は、順の際立った特色である。

歌集『鷺』（昭和十五年刊）の代表歌

立山が後立山に影うつす夕日の時の大きしづかさ

の持つ雰囲気は、右の抄出歌冒頭の「あしがら峠」の一首へと、潤いを加味しつつ引き継がれている。

同じく『鷺』所収の

高やまのいただきにして真夏日は上汚れせる

堅雪照らす

に見られる、静かな観照の目の働きは、『東帰』においても随所に見出だすことができるのである。

七 生活

先に、順は「裸身」をも世間に曝して生きねばならなかった、と述べた。夫婦が国府津の町民から好奇の眼差しで見られたことは想像に難くない。家

の中のことを俊子に任せ、順は町へ出る。「…孤影悄然と手荷物を持って東下りした私は、国府津の町に顔を曝すのが恥かしかつた。けれども致し方ない。配給物を取りに行く。肉や野菜を買ひに行く。豆腐や油揚げを買ふ。郵便局に行く。雑貨屋に行く」（『川田順遺稿集香魂』）。

郵便を出しにゆきたる時の間にかへりは暮れて
劉田夕靄

順には『越天楽』という詩集があり、「国府津の浜」と題する一編が収められている。^(注四)その最終章はこう結ばれる。

西の京に住みかねし／老の歌びと、若草の／妻
と籠らむかくれがの／あづまの果ての此の浜に
／有りや無しや、と陽炎の／忍びて来れば、足
柄の／嶺に立つ虹の頭はれて／人みな知れる恋
ふらくを／鳥澁のしれもの隠すや、と／浪のひ
びきはあざわらふ

その人の心情によって自然は様々な相を見せるものだ。ここに、順の自らを憐れむような姿が表れて

いる。

ただ総じて、こうした環境に対し、歌人は決して卑屈、陰鬱にはなっていない。生来の性のゆえであろうし、また、意地でもそうはなりたくなかったであろう。

その中であつて、順の心中の無念がありありと表白された作品がある。昭和二十五年の章、「徒労」と題する五首である。

あくせくと新聞社めぐり灯のつくころ数寄屋橋
をば再びわたる

待たされて受付の前に立つ久しここまで我はお
ちぶれにけり

傲然と背を向けて椅子による男わが入り来しを
知らぬさまにて

東京にてよきこと何もあらざりき海への町を夜
ふけて帰る

さ夜ふかく我が家をさしてかへるさは逆さに立
てる北斗に向ふ

仕事の依頼か何かで上京し、それが不調に終わっ

た日の虚しさが如実に歌われている。ただしこれらの作には、一面において、順のお捨てきれぬプライドが自ずと滲んでいるという読み方も可能である。「受付の前」で長く「待たされ」ることなどはさほど驚くには当たらないだろうに、以前の地位からすれば、「ここまで我はおちぶれにけり」と慨嘆せずにはおられなかったのである。心身共に一市井人に徹することは、順にとってそう容易ではなかったのだ。また、そういう心情を正直に吐露するところが、いかにも順らしいのかもしれない。

ともあれ、こうした生活を続けていくうちに、少しずつ町民にも馴染みが増えていった。そのようなある日のことである。

慣れて来ると、町への用足しも苦勞でなくなつた。何よりも運動になつて、健康のため、宜しい。それから、だんだん町の人達と顔を覚え合ひ、親しくなる。往來でお辞儀をする人が増加する。殊に、子供達と仲よくなる。先日もSといふ雑貨店に蠅叩きを買ひに入ると、壮年の

亭主が、

「K先生ですか？」

と訊くので、私は敢へて隠さず、肯定した。

「歌をなほして下さいませんか」

「君はいつ頃から作つてゐるのです？」

「戦争中ボルネオに行つてゐましたが、そこ

で五・六十首作つただけです。帰つてからは

一つも出来ません」

私は甘諾して詠草を預かり、早速添削してやつた。(『川田順遺稿集香魂』)。

ここに「子供達と仲よくなる」とあるが、その当時、順と言葉をよく交わした子供の内の何人かは、今も国府津に住んでいる。宝金剛寺の現住職(神谷氏の長男・晴久氏)もその一人である。順は子供好きであった。前夫人との間に実子がいたならば、この歌人の人生はあるいは異なるものになっていたかもしれない。

八 斎藤茂吉との交友

当然のことながら、順は以前から、歌人はもとより多くの知人・友人との付き合いがあつた。本章においては、その中から、斎藤茂吉との交友について触れたい。

国府津に移つた順を案じて、掬泉居を訪れる人々があつた。長谷川如是閑、下村海南、石田礼助、山本義路らである。石田礼助は、元三井物産最高顧問で、後の国鉄総裁である。当時「掬泉居」のすぐ近くの広大な敷地を農園にしていた。順は石田家へ野菜や果物をしばしば貰いに行つてゐる。その礼として毎月、季節の花鳥を詠じた短冊を献じた。また、徳富蘇峰、吉田茂、志賀直哉(註)ら、順の方から訪問する人もあつた。その中の一人に斎藤茂吉がいる。茂吉は順と同年であつた。

昭和二十四年八月三十日、箱根の強羅山荘に暑を避けて滞在していた茂吉を順夫妻が訪ねた。そこでは、次男の宗吉(後の北杜夫)が茂吉の世話をして

いた。『東帰』に、その日のことを歌った「強羅の半日」と題する五首がある。

あしがらの箱根のやまのおくに来てありのまま
なる茂吉と対ふ

茅蜩の鳴くはおほよそ時刻を定めて日に四たび
とぞ茂吉の語る

じんのさうのやまひは長崎時代からと医博士の
大人あきらめて居る

おなじ齡の茂吉の前に恥づらくはわれの賢のす
こやかなること

山菅のねもころころにいたはりて長生せよとい
ふほかはなし

順夫妻の茂吉訪問の日の様子は、『茂吉晩年』（北杜夫）に詳しい。また、当日の茂吉の日記には「午前九時半駅頭ニ川田順夫妻ヲ迎フ。雑談、午食（ビール）、川田ハ白桃、かまぼこ土産、予ハビールト菓子ト汁トヲ馳走ス。（以下略）」（『斎藤茂吉全集第三十二巻』）とある。かつて永井ふさ子との実らぬ愛を経験した茂吉にとって、順の言動は自ずから

なる同情の念を抱かせるものだったのであるまいか。

斎藤茂吉歌集『つきかげ』に収められている次の一首は、おそらくこの日に順から聞いたことを詠んだものだろう。

妻ごみに君ある岡の家居には潮のおとを常に聞
くとふ

以前、順の恋愛を知った茂吉は、前年の十月と十一月の二度、旅の途次のわずかな時間を割いて、北白川の順の家の玄関に立ったのである。そのときの、「君が健康すぐれないで選者を辞退されたと宮内省で承つたので、見舞に来たんだよ」（『孤悶録』）「川田君、御遠慮するには及ばないよ。来年の正月も御歌会始の選者を必ず拝諾するが宜しい。僕は、これだけを君に言ひに来たのだ」（『川田順遺稿集香魂』）という茂吉の言葉は、いずれも深く情のこもるものである。順は「心友」としてこの大歌人を遇した。

その後、東京で病床にあった茂吉に見舞いの手紙

を出し、二度自宅を訪問している。その二度とも病人に配慮して、家人のみに面会したのである。結局、順が直接茂吉と話をしたのは、あの強羅での半日が最後であった。

九 評価

歌集『東帰』には右の他にも、俊子の前夫との間の男子の同居、国府津の歴史、日本の国状、御苑などを歌った作品が含まれるが、注目されるのはやはり、二人の掬泉居での生活詠とその周囲の自然詠である。ここに引用できなかったそれらの中には、今もなお生彩を放つ作品が数多く揃っている。

順が第二次世界大戦時、多くの時局詠、戦意高揚歌に類する作品を発表したことや、その「老いらくの恋」という行動が表面に大きく立ち現れた結果として、歌人としての業績の評価は著しく下がった。また、戦後の慌ただしい短歌界の推移は、川田順を過去の人に押しやってしまった感がある。

各種の文学全集などには、順の作品が抄出されて

いるが、『東帰』については、筑摩書房刊の『現代短歌全集』（第十一巻）に全巻が収められているものの、単独歌集としては、なお一般的に知られていないとは言えない。しかしそれは必ずしも、本書に対する正当な評価ではないと思われる。

昭和二十七年十一月、順夫妻は掬泉居を去って、神奈川県藤沢市辻堂に居を移した。この三年八月ほどの国府津生活は、激動の京都時代とやがて平穩に入る辻堂時代との間にあって、歌人の心身を蘇らせるための必要かつ重要な位置を占めるものであった。ここにおいて編まれた『東帰』は、順にとってまさに新生の思いを託する歌集であったに相違ない。すでに見てきたように、そこに詠出された感情の率直な吐露は、高い作歌技量によって、俗の域を遙かに脱している。さらに、その自然詠に見られる透徹した凝視の姿勢は、今日なお色褪せるものではない。戦後歌壇史における確かな収穫として、本歌集を高く評価するものである。

(注二) 「東帰」の典拠として引用した李涉の詩は、『全唐詩』所収の語句に依った。

(注三) 川田順は昭和二十一年に、皇太子(現天皇)の作歌指導役に任ぜられた。「老いらくの恋」を直接の理由として辞退するまでの二年間ほど、月に一度上京していた。

(注四) 文中の引用歌は『東帰』によるが、『川田順全歌集』を参照して、ルビを補ったものがある。

(注五) 川田順の生前に出版された詩集には、『春の木がくれ』『香雲』がある。本稿において引用した『越天楽』は、順の没後、すでに書名の付されたその詩稿を、俊子夫人が発見して出版したものである。

(注六) 志賀直哉は、川田順をモデルにした「秋風」という短編(戯曲)を発表した。

◇参考文献◇

歌集・詩集

『東帰』『伎芸天』『鷺』『自歌自釈高岳』『史歌熱帯作戦』『宿命』『川田順全歌集』『越天楽』

歌書・論文類

『山海居歌話』『山海居閑話』『西行伝』

自叙伝・随想集類

『孤悶録』『川田順遺稿集香魂』『私の履歴書』『葵

の女』『住友回想記』

研究書・鑑賞書・全集・小説類

『川田順ノート』(鈴木良昭)『戦後の秀歌Ⅱ』

(上田三四二)『茂吉晩年』(北杜夫)『斎藤茂吉全

集』(第三卷、第三十二卷)『日本の詩歌7』『昭

和文学全集35』『大正昭和の歌集』『全唐詩』『三

体詩』『唐詩三百首』『唐詩選』『昭和短歌史』(木

俣修)『短歌史』(阿部正路)『近代短歌史』(篠

弘)『近代短歌と現代短歌』(安森敏隆・末竹淳一

郎)『虹の岬』(辻井喬)『秋風』(志賀直哉)

論文・追悼文類

- 「川田順論」(石川一成。「心の花」所収)「川田順私論」(同上。「短歌」所収)「体内の虫―川田順」(佐佐木幸綱。「佐佐木幸綱の世界6」所収)総合誌『短歌』(昭和四十一年四月号)同『短歌研究』(昭和二十一年五月号)